

フレグランスの香りとボトルとネーミング

そのI (1900年~1999年)

堀田龍志 理事

はじめに

昔から人々を魅了し、使う人を虜にし続けて来たフレグランス。でももしもその素敵で魅力的な香りの滴が、名前もなく、何の変哲もないただのガラス瓶に詰められているとしたら、中に詰められた香りがいかに素晴らしい名香と言えども、その魅力は半減し、ただの“香り”になってしまうことも多いに違いない。今日では、世界中で毎年600品を超す新しいフレグランスが市場に送り出されているが、数年経っても生き残るものはほんの僅かであり、成功するか否かは香りそのものであることは言うまでもないが、ボトルやパッケージのデザイン、ネーミング、そして近年では広告の為のビジュアルなども非常に重要なファクターとなっていることは周知のところである。今回のコラムでは、現在までに市場に送り出されたフレグランスの中からいくつかを例にとり、その香りとボトルデザイン、そしてネーミングについて考察してみたい。

なお本文中のフレグランス名（英語またはフランス語の名称）は、実際の商品ではどのように書かれているかについて各メーカーのHP等で調べて、商品に記載されている名称をそのまま使用した。大文字と小文字が混在している商品名もあれば、ミツコのように大文字だけの名称もあって、おそらくそのフレグランスを発売する側の何かしらの思惑があるのだろうと思う。

● 1900年~1950年

19世紀末期には既にゲランなどからいくつかの近代的フレグランスが出されていたが、本格的な近代フレグランスの幕開けは20世紀に入ってからである。1900年代初めにはフランスでいくつかのフレグランスメーカーが次々に新しい香りを創り出している。香りの世界に身を置く人なら知らない人はいないほど有名な調香師フランソワ・コティエは、1906年に“L'Origan(ロリガン)”を送り出し、1917年には、今日では香りの一つの重要なタイプとなった“Chypre(シプレ)”を発売している。

このフレグランスそのものは今日ではもう終売となってしまうっており、その香りを嗅ぐことは容易ではなくなったが、パリ郊外のベルサイユにフランス調香師協会が設立した“OSMOTHEQUE”という香水資料館に行けば、可能な限り当時の原料を再現して作り、当時のフォーミュラを可能な限り再現して作られた“Chypre”の香りを嗅ぐことが出来る。



コティエ “Chypre” 1917年

写真提供：高砂香料工業株式会社

“Chypre(シプレ)”とは、トルコに近い東地中海に浮かぶ島「CYPRUS(キプロス)」のフランス語名で、古代ギリシャ語のイトスギ(kyparissos)由来説と、同じく古代ギリシャ語の銅(Chalkos)由来説とがある。Kyparissos(キュパリソス)はもともとはギリシャ神話に出てくる人物の名前で、とても可愛がっていた黄金に輝く角を持った牡鹿を誤って投槍で殺してしまい、その罪を永遠に背負いたいと神に願った為、神からイトスギ(サイプレス:CYPRESS)にされたという物語がある。また銅を意味するラテン語が“cuprum”であることは、キプロス(CYPRUS)が大昔から銅の採掘場だったことに由来している。

キプロスは、紀元前の大昔から地中海交易の中継地で大いに栄えた島であるが、当時東洋から運ばれてくる珍しい麝香やアンバーなどの香料と、地中海

沿岸で採れるベルガモットやオレンジなどの柑橘、またローズなどの花などをブレンドした香りが有ったようで、当時大変な人気を呼んだ香りだったようである。

フランソワ・コティエは、この大昔流行った香りのことを何かで知り得たようで、当時のことを調べたりしながら、彼の手によって再生されたのが“Chypre”の香りであると言う話を聞いたことがある。ベルガモットやオレンジの柑橘と、ローズ、ジャスミンのフローラル、更には東方から輸入されるパチュリ、アンバー、シベット、ムスク、そして旧ユーゴスラビア地方で採れるオークモスなどがブレンドされた、落ち着きとコクのある香りである。今から16年ほど前、パリ・ベルサイユのOSMOTHEQUEにあるChypreの香りを、今やすっかり有名になったフランス人パフューマーである私の友人から少し分けてもらって嗅いだことがある。処方も見せてもらったが、天然香料がふんだんに使用され、ムスクやアンバー、シベットなどのチンクチャーが大量に使用された処方であった。Coty社HPに掲載されている、発売当時のボトルやパッケージの写真を眺めて見ると、何となくオリエンタルな雰囲気が感じられるし、名前の“Chypre”には、20世紀初頭に西ヨーロッパに住んでいた人々にとっては、何とも言えない憧れとエキゾチックな響きがあったに違いない。

今日でもシプレタイプに分類されるフレグランスの香りのほとんどにパチュリーの精油が使われており、古くはゲランの“MITSOUKO(ミツコ)”やディオール社の“Miss Dior (ミス・ディオール)”、資生堂の“琴”、最近ではシャネルの“CHANCE(チャンス)”やゲランの“La Petite Robe Noire (ラ・プティット・ローブ・ノワール) シリーズ”の香りの中に見ることが出来る。

1900年代前半は第一次世界大戦、第二次世界大戦と、次から次に続く戦争に明け暮れた時代であったが、その疎ましい時代が終わって世界に平和が訪れた1945年以降になると、フランスでは新しい時代の幕開けを象徴するかのようになり、パリの多くのクチュリエ達がフレグランスを出すようになる。

その先駆けとなったものの中に、ニナ・リッチが1948年に市場に出した“L' Air du Temps (レール・デュ・タン)”というフレグランスがあ

る。日本語では「時の流れ」と訳され、フレグランスそのものも多く日本人女性に愛され、またその香りが非常に優しく気品の漂う香りであることから、多くのスキンケア製品やヘア製品などにアレンジされた。今日でもこの香りが好きだと答える日本人は多い。

香りは前述したように優しいカーネーションを中心としたフローラルと、心地良く残るムスク等の香りで構成されており、男性の我々にとってもほのかな色香と清潔感のあるこの香りは何とも心地良い香りで、まさに戦争が終わって平和で安心して暮らせるという安堵する気持ちを表現したような香りになっている。ネーミングも優しく穏やかに過ぎる時間の流れを表しているようであり、響きもとても心地良い。ボトルのデザインを見てみると、これもまた平和のシンボルである鳩がデザインされたキャップに、優しい丸みのあるボトルという組み合わせになっており、香り、ボトル、ネーミングの全てが「平和」を印象付けるように作られた逸品である。



ニナ・リッチ “L' Air du Temps”
1948年

● 1950～1999年

戦争の傷跡が少しずつ薄くなって来た1950年以降になると、更に多くのデザイナーズフレグランスが市場に顔を出すようになる。フランスではマルセル・ロシヤスから1960年に“Madame Rochas (マダム・ロシヤス；ロシヤス夫人)”、エルメスが1961年に“Caleche(カレーシュ；4輪馬車)”、パコラバンヌが1969年に“Calandre (カランド

ル；光沢機）”、イヴ・サンローランが1970年に“Rive Gauche（リヴ・ゴージュ；左岸）”を市場に送り、アメリカではエステー・ローダーから1972年に“Aliage（アリアージュ；合金）”を、レブロンからは1973年に“Charlie（チャーリー；人の名前）”を、ラルフ・ローレンから1978年に“Lauren（ローレン；デザイナーであるRalph Laurenラルフ・ローレン自身の名前）”などを発売した。

“Aliage”は、以前は“Alliage”と記載されていたが、現在エステー・ローダーでは“L”の一つ少ない“Aliage”という名称で、通販のみで販売されているようである。



イヴ・サンローラン “OPIUM”
1977年

写真提供：曾田香料株式会社

この期間に発売されたフレグランスの中で、ボトルと名前、そしてボトルに封じ込められた香りとは一体となって、私の脳裏に強いインパクトを与えたものが三つある。一つ目は1977年にイヴ・サンローランから出された“OPIUM（オピウム；阿片）”である。香りはゲランの“SHALIMAR（シャリマー；愛の宮殿）”の流れを汲むオリエンタル・アンバー調で、マンダリンの爽やかさとジャスミン、カーネーションのフローラル、そこにオリエンタルな甘さとエキゾチックなムードを与える没薬（ミルラ）やアンバーなどの香りがブレンドされた、何とも言えないエキゾチックな香りである。名前も「阿片」という奇抜な名前だが容器もとても斬新で、日本の印籠を想起させる何とも東洋チックなデザインとなっている。現在でも商品は販売されているが、発売当初のボトルから一新されており、個人的にはちょっと残念な気がしている。

二つ目はディオールから1985年に発売された“POISON（プワゾン；毒）”というフレグランスである。まず驚かされたのはその名前の意味。「毒」という猛烈に危険な名前をフレグランスに付けて出したことにビックリさせられた。容器も白雪姫の話に出てくる「毒りんご」のようなフォルムで、ボトルの色が黒に近い濃い紫がかかった色で、中味の液の色は紫っぽい色がついており、まさに「毒」のイメージを表現した逸品で、強烈な印象を与えた。香りも全体はフローラルでパウダリーウッディーな印象に出来上がっているが、中にシナモンの類のスパイスや、プラムやグレープの妖艶なフルーツノートも絡ませてあり、独特の香りに仕上がっている。日本でも大々的にプロモーションを展開したことも有ってかなり評判になり、このフレグランスの名前が付けられた、「プワゾンの匂う女」というタイトルの小説が出たことを記憶されておられる方も多いことだろう。私はちょうどこのフレグランスが発売された1986年の冬にフランス・パリへ仕事で出張することがあり、当時訪問した香料会社のあるパフューマーにこのフレグランスの人気はどうかと尋ねたら、「パリの街はすっかりプワゾンの香りで毒されてしまったよ！」と上手い表現で説明してくれたことを良く覚えている。

コティエの古いフレグランスである「L' ORIGAN」の流れを汲んだ、「Oscar de la Renta」というデザイナーズフレグランスの香りの流れに入る、いわゆるオリガンタイプの香りの一つであると思われる。



ディオール “POISON”
1985年

写真提供：曾田香料株式会社

そして三つ目は、日本人デザイナーとして世界的に有名になった三宅一生が、1992年に初めて市場へ送り出した、“L’EAU D’ISSEY（ロー・ド・イッセイ；イッセイの水）”と名付けられたフレグランスである。中村会長が出版された「調香師の手帖」の中にも書かれているが、会長ご自身がこのフレグランスの開発時に立ち合わせておられ、その時に三宅一生氏自身が出された言葉は、「Water and Air」、 「Transparent」、 「Clean」、 「Contemporary」、 「Pure」という五つの言葉であつたらしい。このことを踏まえて私なりに解釈してみた。

デザイナーの三宅一生氏は、日本人独特の考え方である、「浄化（禊：みそぎ）」によって得られる“純粋性”の思想を香りの中にも表現したいとの思いから、神社への参拝時や神と向かい合うなどの神事には無くてはならない「水」にテーマを見い出して、この作品を創り出したのではないかと私は思っている。ボトルデザインにもそのテーマが充分過ぎるほどに反映されていて、一滴の水滴をキャップに見立てた見事なフォルムのクリスタルガラスとなっている。もしかしたら、その水が氷のつららとなって固まり、そして温まった時“一滴一滴がまた水に戻って静かに落ちる様”を逆向きのデザインとしたボトルを作り出したのではないだろうかと思ふ。中に納まるフレグランスの香りもまた、それまでに少しずつ流行り出していた“マリンノート（海の香りをモチーフにしたもの）”に、更に透明感を与えて正に「真水」のイメージを香りで表現した、今までにない画期的な香りとして創られている。瑞々しいフローラルノートは、ローズやロータス（蓮）、ホワイトリリー（白ユリ）と、Calone（キャローン）と呼ばれる独特のウォーターリーグリーンな香りを持つ合成香料などから構成されている。L’EAU D’ISSEY発売後から、続々とこの流れを汲む香りのフレグランスが沢山市場に出て来ており、今でも「Aquatic Note（アクアティックノート：瑞々しくややグリーン感のあるウォーターリーな香りのことを言う）」というグループを創り出すほどになっている。

[2000年以降のフレグランスについては、また次の機会に掲載致します。]



イッセー ミヤケ
“L’EAU D’ISSEY Parfum”
1992年

《文献》

THE FRAGRANCE ‘92世界の香水コレクション NOW企画

堀田龍志 プロフィール

資生堂 化粧品開発センター チーフパフューマー
日本調香技術普及協会 理事長
国際香りと文化の会 理事
フランス調香師協会 会員
イギリス調香師協会 会員